

通り三町八坂神社祭典(下町編)

添田 悟郎

Yasaka-Shrine-Saiten of Torisancho (Shimocho edition)

Goro Soeda

神奈川県中郡二宮町の二宮地区には、国道1号沿いの上町・中町・下町で構成される“通り三町”と呼ばれる範囲があり、毎年7月第3日曜日にこの三町で祀る八坂神社の祭典が行われる。現在は八坂神社としての社殿は存在しないが、神輿蔵がある袖ヶ浦公園を祭場にして三町が合同で祭典を執行する。以下に平成23年(2011年)7月17日に行われた祭典と前日の宵宮を、三町の中で最も氏子範囲の広い下町を中心に紹介する。下町の見所は昭和2年(1927年)頃に製造され、三町で唯一現役で活躍している山車の巡行と、三町が所有する元治元年(1864年)に製作された八坂神社神輿と下町で所有する6基の神輿を加えた、7基の神輿による“七連渡御”である。

In Ninomiya, Ninomiya-machi, Naka-gun, kanagawa-Pref, there is “Tori-Sancho” eare consists of kamicho, nakacho and shimocho along National Route 1. Tori-Sancho holds the annual festival for Yasaka Shrine deified by this area on the third Sunday in July. Although there is not a building or a site for Yasaka Shrine, the festival is held on Sodegaura Park where the hangar for its portable shrine made 1864 is. In this report, I introduce the festival “Yasaka-Shrine-Saiten” in 17th July 2011 and “Yoimiya” previous day regarding mainly Shimocho whose area is biggest in Tori-Sancho. The highlight of shimocho is not only the parade of Dashi made 1927, but also “Nanaren-Togyo” the parade of 7 portable shrines; one Yasaka Shrine owns and the others shimocho owns.

1. 八坂神社

1-1. 幻の八坂神社

「八坂神社」は国道1号に沿った通り三町(上町・中町・下町)で祀られているが、現在は社殿などが存在せず、八坂神社の歴史を確認できる資料は殆どない。当社は二宮町の総鎮守である川勾神社の所管で、神奈川県神社庁によればその所在地を下浜端86としているが、神奈川県の宗教法人名簿には下向浜86と登録されている。さらに、昭和5年(1930年)に発行された『神奈川県中郡吾妻村地番段別入地図(東京・市町村地籍調査会編)』によると大字二ノ宮の下向浜86の位置に鳥居の地図記号が記載されており、字名は異なるものの当社は現在の下町内にある二宮86に存在していたことになる。



図 1-1. 二宮 IC 入口(国道1号)



図 1-2. 浜端橋

この場所は二宮交差点から西湘バイパスの二宮インターチェンジ(1969年使用開始)を繋ぐ道路(国道1号)が造成されており、

古老の話によると造成以前は現在の浜端橋の辺りに神輿蔵はあったが、社殿は存在していなかったようである。

1-2. 元町の分離

旧二宮村(塩海村)はもともと通り三町の上町・中町・下町に入会(現在の元町)を加えた四部落で構成され、八坂神社の祭礼も四町合同で行われていた。しかし、祭礼では四町内の若者が八坂神社にあった1基の神輿を順番に担ぐことになっており、四部落での渡御は紛争が絶えなかったようである。そこで、当時の入会名主「松木七郎右エ門」・名主「神保勝右エ門」・村役「池田清右エ門」の3名が明治3年(1870年)に創祀願主とり、川勾神社祀官「二見賢景」に懇願して八坂神社1社を入会に造営創祀した。入会には梅沢住人の宮大工棟梁であった杉崎内匠政貴によって神輿も製作され、入会の祭礼は単独で行われるようになった。

この四町で祀っていた八坂神社が下向浜にあった八坂神社と同じものであったかどうかは不詳であるが、元町には現在も八坂神社の社殿が存在し、元町の八坂神社祭礼も単独で行われている。

2. 八坂神社祭礼の歴史

通り三町の1つである下町の氏神は「秋葉神社」で、4月の第2

日曜日に“四社祭”と称し、上町の「浅間神社」、中町の「守宮神社」、元町の「八幡神社」と同じ日に例祭を執り行っているが、祭礼の規模としては通り三町が合同で行う八坂神社祭典の方が大きい。

八坂神社の例祭日は江戸時代から明治初期までは旧暦の6月7日であったが、明治6年(1873年)の改暦より1ヶ月遅れの7月7日となった。一方、明治初年から通り三町と分離した入会(現元町)の八坂神社では、祭礼は単独執行であったものの例祭日が通り三町と同じであったため、依然として紛争が絶えなかったことから、明治43年(1910年)に元町は7月12日へ例祭日を変更した。戦後は生活が変わって人口も増え、さらにサラリーマンが増えてきたことから、通り三町と元町の宮世話人が話し合い、双方とも7月の第2日曜日に行われるようになったが、現在は7月第3日曜日になっている。

古老の言伝えによると昔は八坂神社(神輿蔵)を出た神輿が、中町の守宮神社に設置されたお仮屋に安置され、三町の人々が参拝する慣わしになっていたようである。宮入り前になると現在の横浜銀行(二宮駅入口の交差点付近)より塩海橋までのなだらかな坂となっている国道を、全町の担ぎ手により神輿が疾走して何度も坂を上り下りしたという。輿棒につかない担ぎ手も手をつないで神輿の周辺につき、威勢のよい掛け声と共に一丸となって神輿が疾走する光景から、この担ぎ方を総称して“野走れ(のっばれ)”と呼んでいた。

3. 宵宮

3-1. 準備

祭典の前日は午前9時頃に下町老人憩の家(以下憩の家)へ集合し、祭典の準備と夕方の宵宮まつりの準備を進める。準備は塩海橋の交差点での幟立てから始まり、憩の家には竹の鳥居と注連縄が取り付けられる。宵宮まつりの会場となる下川窪児童遊園地(以下下川窪公園)にも竹の鳥居が設置され、憩の家から模擬店に必要な機材などが運び込まれる。

午後からは祭囃子のための車屋台と山車の準備が行われ、設置された模擬店へ食材が運び込まれると、宵宮まつりの開始に合わせて焼きそばや焼き鳥などの調理が始められる。



図 3-1. 幟立て(塩海橋)



図 3-2. 模擬店準備(下川窪公園)



図 3-3. 車屋台準備(山車小屋)



図 3-4. 山車準備(下川窪公園)

3-2. 宵宮まつり

宵宮まつりは16時から18時まで行われる下町独自のイベントで、開始と終了時には下町自治会の代表区長の挨拶がある。模擬店は大人を中心に運営されるが、中学生ぐらいの年代の子供達がボランティアで手伝い、参加者に焼きそばやかき氷などを手渡す姿が見られる。宵宮まつりの間は車屋台に囃子方が乗り込み、下町内を囃子を奏でながら巡行していく。また、公園の出入り口に置かれた山車には子供達を集め、舞台の上で交代しながら囃子が演奏される。



図 3-5. 中学生のボランティア



図 3-6. 賑わう宵宮会場



図 3-7. 巡行に向う車屋台



図 3-8. 山車では囃子を披露

3-3. 禁酒固め

宵宮まつりが終わると「禁酒固め」と呼ばれる席が設けられるが、これは一般的には聞かれない言葉である。地元の方の言伝えによると、八坂神社の祭典中に酒を飲んだ者が揉め事を起こしたために、二度と同じようなことが繰り返されないように、宵宮の時に酒を十分飲み、祭典中は酒を控えるという慣わしがこの「禁酒固め」の由来であるという。現在は祭典中に禁酒をすることはなく、酒を飲むことはできるが、宵宮ではこの禁酒固めという昔からの慣わしが続いている。

禁酒固めが終わると宵宮まつりで使用した機材などをトラックに積み、憩の家や児童館へ運搬していく。後片付け後は児童館にて下町の神輿会である志ほみ会の禁酒固めが行われた。



図 3-9. 禁酒固めの準備



図 3-10. 禁酒固めでの乾杯



図 3-11. 後片付け



図 3-12. 志ほみ会の禁酒固め

4. 八坂神社祭典

4-1. 準備

下町では触れ太鼓として車屋台が早朝から町内を巡行するため、山車小屋へ6時に集合して縮太鼓を締めていく。太鼓が締め終わると屋台へ設置し、囃子を奏でながら下町内を巡行していく。車屋台が出発すると下川窪公園へ移動し、山車の巡行に向けて6時20分頃から準備が始まる。前日の宵宮では山車を止めた状態で囃子を演奏していたが、祭典当日は山車を曳き回す為、方向転換するハンドルや子供達が山車を曳くための綱を取り付けていく。



図 4-1. 縮太鼓の準備



図 4-2. 屋台が山車小屋を出発



図 4-3. 山車に縮太鼓を設置



図 4-4. 正面のハンドルと綱

7時からは祭典の会場となる袖ヶ浦公園に移動し、式典に向けて八坂神社神輿と三町の神輿の準備を行い、式典が開始されるまでには三町の車屋台が公園に揃う。



図 4-5. 中・小神輿を下町



図 4-6. 祭場に揃った三町の神輿



図 4-7. 八坂神社神輿を移動



図 4-8. 供物を供えた神輿

4-2. 式典と宮発ち

八坂神社の社殿は存在しないが、袖ヶ浦公園の敷地にある神輿蔵前にて一般的な神社と同様に式典が行われる。八坂神社祭典は三町が輪番で当番を務め、2011年は当番長である中町が進行役を務めた。式典は川勾神社の神主により7時45分から神事が執り行われ、最後にお神酒で乾杯をして終了となる。

式典が30分程で終了すると八坂神社神輿では宮発ちに向けて

準備が進められ、それ以外の神輿はそれぞれの町内へ移動し、囃子の車屋台も当番町の中町以外は各町内へ戻る。八坂神社神輿前では中町の神輿会である守宮神会により出発の式典が執り行われ、8時45分頃に袖ヶ浦公園を出発する。これより八坂神社神輿は三町を順番に渡御していくが、最初に当番町である中町を渡御し、続いて上町、最後に下町を渡御する。



図 4-9. 神輿蔵前での式典



図 4-10. 会場を出る下町の屋台



図 4-11. 中・小神輿を積む下町



図 4-12. 八坂神社神輿の宮発ち

4-3. 山車巡行

八坂神社神輿が当番町である中町を渡御している間に、下町では山車と車屋台が巡行する。八坂神社神輿の渡御は当番町から始まるため、巡行する時間帯は下町の神輿渡御と重ならないように毎年変る。2011年は宵宮まつりの会場でもある下川窪公園を9時45分頃に出発し、塩海橋際→浜端橋→江川宅前の3ヶ所の休憩場所を経由し、山車小屋には11時35分頃に到着して巡行は終了となった。



図 4-13. 出発式(下川窪公園)



図 4-14. 山車が公園を出発



図 4-15. 子供達を団扇で扇ぐ



図 4-16. 水分補給(塩海橋際)



図 4-17. 子供による囃子(浜端橋)



図 4-18. 綱を曳く子供達

巡行中で一つの見せ場となるのが、山車の舞台部分を回転させる場面で、2011年は塩海橋際と江川宅前の2ヶ所の休憩所で舞台を360度(1周)回転させた。全国的に見れば舞台を回転させる山車の構造、いわゆる「廻り舞台」は他にも見られるが、二宮町近隣では非常に珍しいといえる。巡行中は子供達が「ワッショイ」という掛け声で山車を一生懸命に曳く姿が印象的で、親御さん達は暑さを少しでも和らげようと子供達を団扇で仰ぐ。

巡行が終わると子供達はお菓子を受け取り、各区で行われる午後の子供神輿の渡御までは昼休憩となる。山車からは飾り付けを外して小屋へ納めていくが、車屋台は午後に行われる神輿渡御に同行するため、この時点では小屋へは納めない。山車を小屋へ納めると関係者は憩の家で昼食を取り、上町から八坂神社神輿を引き継ぐまでは休憩となる。



図 4-19. 廻り舞台(江川宅前)



図 4-20. お菓子の配布(山車小屋)



図 4-21. 山車を小屋へ納める



図 4-22. 昼休憩(憩の家)

4-4. 神輿渡御

八坂神社神輿の渡御は当番の町内から始まるため、山車の巡行と同様に下町内での神輿渡御の時間帯も年によって変わってくる。2011年は八坂神社神輿が15時15分頃に休憩所となっている下町の原宅前に到着し、上町の神輿会である上楠会から下町の志ほみ会へ引き渡された。原宅前では代表区長や宮総代の挨拶、そして友好団体の紹介などがあり、乾杯をすると15時30分頃に一本締めをして出発した。近年は担ぎ手の減少もあり、途中で神輿を台車に乗せて移動する場面も見られるが、徳富蘇峰記念館→喜美(日本料理店)→原駐車場→下浜公園の4ヶ所の休憩所を経由し、神輿は志保美囃子の車屋台に先導されて下町内を練り歩く。

なお、下町地区は4つの区に分かれており、それぞれが所有する子供神輿を子供達が担いで渡御するが、そのルートや時間帯は各区ごとに設定されている。八坂神社が下町内を渡御している間も、子供神輿と遭遇する場面が何度か見られた。



図 4-23. 一本締めで出発(原宅前)



図 4-24. 芯出し(徳富蘇峰記念館)



図 4-25. 甚句で揉む神輿(喜美)



図 4-26. 神輿を先導する車屋台

最後の休憩場所を出発した神輿は、下川窪公園で待機していた下町が保有する6基の神輿と合流し、ここから下町内の神輿渡御で一番の見せ場となる七連渡御が始まる。一行は国道1号に出ると西へ向って左折し、18時30分頃に八坂神社神輿だけが憩の家の敷地内へ入って神輿を揉み、無事に輿を下ろすと一本締めて軽い食事を取る。それ以外の神輿は敷地横の道路に輿が下ろされ、休憩の間に飾り付けや晒が外されると屋内へしまわれる。



図 4-27. 水分補給(原駐車場)



図 4-28. 一本締め(下浜公園)



図 4-29. 七連渡御(国道1号)



図 4-30. 最後の芯出し(憩の家)

4-5. 三町宮入渡御

下町内の神輿渡御を終えると、憩の家から祭場である袖ヶ浦公園までは三町による合同渡御となり、通り三町で組織される「通り三町神輿連合会」が仕切っていく。八坂神社神輿は憩の家を19時頃に出発するが、ここから上町と中町の車屋台も合流し、この年は下町が神輿を先導、上町が神輿の直後、中町が最後尾について隊列を組んだ。国道1号を西へ向った一行は途中で中町の守宮神社前の魚藤駐車場場で休憩を取り、再び出発すると中央通り入口の交差点を左折する。行列は上町と中町の境となる道を海岸方向へ進み、20時頃に神輿蔵がある袖ヶ浦公園に到着する。神輿は三町の囃子に囃されながら敷地内を反時計回りに3周し、神輿蔵の前で芯出しをしながらしばらく揉むと、輿を下ろして三本締めで無事に宮入渡御を終える。



図 4-31. 宮入渡御



図 4-32. 芯出し(魚藤駐車場)



図 4-33. 袖ヶ浦公園で練る神輿



図 4-34. 三本締め

4-6. 直会

神輿が宮付けされると後片付けが始まり、神輿の飾り付けや晒を外し、上町と中町の車屋台も敷地内で飾り付けを外していく。その一方で、敷地の中央には白線で円が描かれ、直会(なおらい)の準備が整うと、指名された関係者が履き物を脱いで円の中央に歩み出て、「サセサセ」の掛け声と共に柗に注がれた樽酒を飲み干していく。祭場での直会が終わると八坂神社の祭典も幕を閉じ、下町の関係者は憩の家に移動して下町としての直会を催す。



図 4-35. 宮入後の直会



図 4-36. 下町の直会(憩の家)

5. 神輿

5-1. 八坂神社神輿

八坂神社神輿は山西村の宮大工であった周助が元治元年(1864年)6月に製作したものであるが、製作された経緯など詳しいことは分かっていない。神輿の内部には「神応院」と書かれた棟札が残されており、この寺が係わっていたことは推測されるが、神応院(現在の中町公会堂の位置にあった)は既に廃寺となっている。また、原弥惣氏の祖先が町内の若者のために寄付されたという言い伝えが残されている。



図 5-1. 八坂神社神輿



図 5-2. 神輿蔵(袖ヶ浦公園)

5-2. 下町の神輿

通り三町と呼ばれる上町・中町・下町では八坂神社神輿を共同で所有しているが、下町単独では中神輿と小神輿、さらに4基の子供神輿を所有している。これら7基の神輿が全て揃うのは八坂神社祭典だけであり、下町内の最後の渡御で見られる「七連渡御」が当祭典の見所の一つとなっている。

子供神輿4基は神奈川県産の檜(ひのき)の間伐材を利用したもので、平成20年(2008年)1月12日に完成披露式典が行われ、憩の

家には地元住民百人以上が集り、祭り囃子の演奏も披露された。子供神輿ができる前には花で飾った花神輿があったが、地域住民の集会で地域の行事に参加する住民が少なくなったことが話題となった。そのなかで「子供が参加する機会が増えれば大人も一緒に参加する」という意見があがり、神奈川県産の檜のPRを兼ねて子供神輿の新調が決まった。財政的にゆとりがないために自治会員の蓮場良之氏が、知人で木材について詳しい秦野市在住の神奈川県職員(林業課)の小島康弘氏に製作を依頼した。

木工が趣味の小島氏にとって神輿造りは始めてであったが、間伐材の活用がアピールできると引き受けた。仕事の傍ら神輿の作業は休日のみで、たった1人で1年を掛けて完成させた。通常1基数十万円とされる子供神輿だが、小島氏の尽力により材料費の20万円だけで白木の神輿が4基完成した。なお、下町自治会は4つの区に分かれており、それぞれの区の子供達が担げるようにと4基が製作された。



図 5-3. 中神輿



図 5-4. 小神輿



図 5-5. 4基の子供神輿



図 5-6. 七連渡御

6. 祭囃子

6-1. 志保美囃子

下町の「志保美囃子」は大正末期に青年会員が大磯町西小磯(西小磯は東西2つの囃子がある)の東から習得したと伝えられ、囃子の伝承が危うくなった昭和51年(1976年)に「志保美囃子保存会」が創立された。志保美囃子は二宮町の中では「鎌倉囃子」に分類され、同じ通り三町である中町にも下町から鎌倉囃子が伝わっている。現在の活動は、町内の氏神である春の秋葉神社祭礼や夏の八坂神社祭礼で囃され、秋の川勾神社祭礼では神輿送迎囃子として祭典を盛り上げている。



図 6-1. 囃子の練習(憩の家)



図 6-2. 舞台上での演奏

囃子は「大太鼓1」・「小太鼓2~3」・「鉦1」・「笛1」で構成され、

曲目は「ブツケ」・「野帝」・「宮聖天」・「聖天」・「仕丁面(玉入り)」・「人婆」・「キザミ」・「野帝」の順で演奏される。囃子の特徴は曲目ごとに舞が入り、「村長」・「白狐」・「翁」・「おかめ」・「ひよっこ」・「狸」の踊りを伴う。八坂神社祭典前の練習は子供達のために10日ほど行われ、多い時で小学生は80名くらい参加し、中学生の会員も20名ほどいるという。

6-2. 山車

下町には昭和2年(1927年)頃に建造されたと伝えられる山車があり、現在でも現役で使われている。この山車は家の梁などでよく見られる松材が使われ、古老の話では昔は脂(ヤニ)が出ていたという。下町の山車の特徴としては「廻り舞台」が上げられ、台座と舞台を固定する止め具を抜くと舞台を回転することができ、休憩場所では回転する舞台の上で子供達が囃子を奏でる。

過去には川勾神社例大祭の神輿送迎の囃子として、上町と中町の山車と共に囃子を演奏して東海道を巡行していたが、交通状況や時代の変化と共に現在では八坂神社の祭典のみでその姿を見ることができる。なお、上町にも山車は存在するが、八坂神社祭典では設置するのみで曳くことはなく、中町には船形の山車があったが、現在は残されていない。



図6-3. 山車(正面)



図6-4. 山車(側面)



図6-5. 梃子で方向転換



図6-6. 昭和2年の山車

かつては、現在の憩の家の場所に薬師堂と呼ばれる札所があり、その敷地内に山車を格納する小屋があった。昭和40年代に現在の憩の家が建てられると、それまであった山車の保管場所に困り、当時は祭礼が一時中断されていたこともあって山車の処分を考えたというが、先人達の貴重な遺産を残そうと場所を移して現在の山車小屋を作った。



図6-7. 山車小屋



図6-8. 車屋台

下町には上記の山車の他に、トラックの荷台に載せて巡行する

ための囃子屋台も存在する。山車が巡行するためには多くの人手が必要とされ、八坂神社の祭典で実際に巡行できる時間は2時間程であるため、触れ太鼓としての巡行や神輿に同行する際はトラックの屋台上で囃子を演奏する。屋台を格納する小屋は山車小屋の隣に作られている。

7. むすび

下町は通り三町の中でも氏子範囲が一番広いこともあり、三町で共同で行う行事以外にも、前日の宵宮まつりや祭典当日の山車の巡行など、八坂神社祭典に下町全体が精力的に取り組んでいる姿が印象的であった。特に前日まで下川窪公園で動かずに止まっていた山車が、祭典当日に動き出した瞬間はたいへん感動した。動くとは分かっていても、それまで動かずにいた大きな物体が、果たして動くものかという錯覚もあったかもしれない。昭和2年頃に完成した山車が始めて動く姿を見た当時の人々の感動は、私のそれとは比較にならないほど大きなものであっただろう。今後も伝統のある志保美囃子の継承と共に、山車の巡行も末永く続くことを願う。

通り三町の八坂神社祭礼の歴史に関してはもう少し詳細に紹介したかったが、八坂神社の社殿が存在しないことや、祭礼に関する資料が少ないこともあり、過去にどのような祭礼が行われていたか不明な点が多かった。調査によると昔は八坂神社の祭礼が「お天王さん」と呼ばれ、12日または13日の「中天王」、15日の「終い天王」と1週間くらい続き、神楽や芝居なども行われていたという話もある。さらに、二宮海岸松原では神輿が海の方に向けて置かれ、正面の唐戸を開いて神霊を海に送るという「神送り」と称する神事や、元町の八坂神社と共に禊をしたという言伝もあるが、資料や語り手によって内容が異なっているのが現状である。これは、二宮地区から元町が分離して八坂神社祭礼の形式が変わったことや、川勾神社の祭礼にも三町が参加していること、さらに、二宮町では殆どの地域で氏神と併せて八坂神社を祀っているため、これらの情報が交錯している可能性も考えられる。通り三町の八坂神社祭礼の歴史調査は非常に困難といえるが、今後の課題としたい。

○参考文献

- 『二宮町郷土誌』 二宮町教育委員会 (1972)
- 『二宮の昔ばなし』 二宮町教育委員会 (1981)
- 『浜降祭と神奈川の神輿』 監物恒夫 (1986)
- 『二宮町民俗芸能保存会連絡協議会 創立20周年記念誌』 同協議会 創立20周年実行委員会 (1994)
- 『二宮町民俗調査報告書』 二宮町教育委員会 (1997)

作成：2012年1月